「男、突っ走る！」

第42回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（20）　名古屋芸術専門学校2年生

門野　賢哉（20）　中央高校元生徒
志田　悠喜（20）　中央高校元生徒
中岡　壮吾（20）　中央高校元生徒
松井　武（20）　中央高校元生徒
杉島　恭平（20）　中央高校元生徒

尾形　安代（56）　中央高校元3年2組担任（進路主任）

福沢　瑞枝（20）　名古屋芸術専門学校2年生
加藤　直也（20）　名古屋芸術専門学校2年生
大久保　正樹（24）　名古屋芸術専門学校2年生
船倉　篤志（20）　名古屋芸術専門学校2年生
奥村　裕司（21）　名古屋芸術専門学校2年生
山口　拓海（20）　名古屋芸術専門学校2年生
安永　和也（20）　名古屋芸術専門学校2年生

1　名古屋芸術専門学校・屋上

雅也と瑞枝が、缶ジュースを飲みながら話している。

雅也「（笑って）そんなこと言ったんだ」

瑞枝「何がおかしいの」

雅也「いやいや、みずちゃんらしいと言うか、よく言ったなぁと思って」

瑞枝「それぐらい言わないと気が済まなかったの。うっちーだって、去年散々板挟みに遭ったでしょ」

雅也「まあね。二人からのＬＩＮＥに返信するの、結構大変だった（と苦笑する）」

瑞枝「でしょ。うっちーだって、言わば巻き込み事故に遭遇しちゃった被害者みたいなもんなんだから」

雅也「大袈裟だね」

瑞枝「だって本当のことでしょ。二人から相談されることがなかったら、うっちーだって余計な負担背負わずに済んだんだから」

雅也「まあ、それはあるかもしれないけど、

別に気にしてないから。二人とも、大事な友達だから、俺にとっては」

瑞枝「人が良いんだから、うっちーは。でも、去年みたいな思い、もうしたくないでしょ」

雅也「それは、まあそうだけどね」

瑞枝「だから面倒なことになる前に、私からあいつに釘を刺しといたの」

雅也「よく先手打ったね、すごいは」

瑞枝「私だって、去年みたいな思いをまたするのは嫌だから」

雅也「一年間、同じ専攻で活動してきた仲だけあるね」

瑞枝「去年アメリカ研修に行ったときだって、おっくーやなつ姐さんと一緒に話し合ったじゃない」

雅也「あったね、そんなことも」

瑞枝「私はね、今年こそ平和な一年にしたいと思ってるの。だから言いたくないことだって、はっきり言わなきゃなと思ってね。眞榮田のためでもあるんだから」

雅也「しっかりしてるんだ、みずちゃんは」
瑞枝「別に大したことなんてやってないけどね」
雅也「でも、今の眞榮田には、みずちゃんみたいにブレーキを踏んでくれる人が必要なのかもしれないね。いくら仲が良くても、俺にはブレーキを踏める力はないから」
瑞枝「うっちーだって、ブレーキを踏んで止めれる人でしょ。少なくともこの学校のメンツでは。高校時代はどうか知らないけど」
雅也「どうかなぁ。（と何かに気づいて）あれ……高校……？」
瑞枝「どうしたの？」
雅也「ねえ、今月ってもう四月だよね」
瑞枝「当たり前のこと言わないでよ。二年生になって新学期が始まったってことは、もう四月でしょ」
雅也「（唖然と）やばッ……しまったッ」
と、慌ててドアを開けて去っていく。
瑞枝「え……ちょっと、うっちー？」

2　居酒屋（夜）

賢哉が襖を開けて入ってくる――雅也、悠喜、壮吾、恭平が迎える。

賢哉「わりい、遅くなった」

悠喜「ようやく来たよ、今日の主役が」

雅也「待ちくたびれた、もうお腹ペコペコ」

賢哉「いきなり集まろうなんて連絡してくるから、こっちは予定合わせるの大変だったんだぞ」

雅也「急に集まる計画を立てたのは謝る。でも、かどけんがこの三月で通信高校を卒業したこと、俺すっかり忘れてて。一日でも早く卒業祝いしなきゃと思ってさ」

恭平「俺も大学のゼミのことで頭いっぱいで、完全に忘れた」

壮吾「俺も」

悠喜「同じく、申し訳ない」

賢哉「良いんだよ、別に。みんなと一年遅れでの卒業なんて、嬉しくないしさ。だから

俺も、何も言わなかったんだよ」
雅也「でも無事に卒業できて良かったじゃん。正直、かどけんは通信制高校も途中で辞めるんじゃないかなって思ってた」
賢哉「実を言うと、正直卒業単位ギリギリだったんだよ」
悠喜「マジか」
壮吾「でも、卒業はできたんだ」
賢哉「まあ、何とかな。成績なんて良いんだよ、卒業さえできれば」
雅也「そうそう。学校生活楽しんで、ちゃんと単位取れば良いんだから」
恭平「珍しいな、うっちーがそんなこと言うなんて」
壮吾「ああ、意外」
雅也「学校生活って、いろいろあるんだなって最近思うようになって」
賢哉「お前もいろいろあるんだな」
雅也「まあね」
悠喜「なあ、そろそろ何か注文しない？」

恭平「それもそうだ」
壮吾「すいませーん（と店員を呼ぶ）」
×　×　×
烏龍茶で乾杯する一同。
一同「かんぱーい」
それぞれ料理を食べながら、
壮吾「うっちーは、相変わらず脚本書いてるんだ」
雅也「まあね。そーぴはどうなの？　抹茶の製造工場は、もう慣れた？」
壮吾「一年経って、ようやくってとこかな」
賢哉「志田はどうだ？　美容師のほうは」
悠喜「なかなか大変だよ。覚えることも雑用も多くてさ」
雅也「勉強苦手だたもんね。検定勉強だって、確かほとんどしてなかったでしょ」
悠喜「だから途中から、検定そのものは受験しなかったんだよ」
雅也「あれ？　そうだっけ？」
賢哉「（雅也に）検定に没頭してたお前には、

そんなこと気にもしてなかったんだろうな」
雅也「高校の時は、とにかく検定勉強ばっかだったからね。でもさ、専門学校入ってからは、技術的な授業ばっかりだから、検定勉強みたいに暗記するようなことはほとんどないの」
恭平「大学は試験とかテストとかあるけど、専門はないの？」
雅也「ああ、確かに言われてみれば、テストっていうテストはないわ。基本的に課題提出で終わりだからね。そりゃ、頭脳も低下しちゃうわな」
賢哉「よく言うよ。脚本書く頭があるだけでも大したもんだぞ」
雅也「かどけんは、ボートレース今でも行ってるの？」
賢哉「当たり前だろ」
雅也「だよね」
悠喜「ほどほどにね」
賢哉「分かってるよ」

雅也「かどけんからボートレース取ったら、
何も残らないもんね」
壮吾「高校の時から、いつもレースの予想し
てたっけ？」
雅也「あったあった。鞄に競艇新聞と煙草入
れてさ。今思えば、男子高校生の荷物とは
思えないようなもの持ってきたよね」
悠喜「そうじゃなかったら、『おっちゃん』
なんてあだ名つけないだろ」
雅也「確かに」
賢哉「他の同級生とは、会ってるのか？」
壮吾「そういえば、卒業してからほとんど会
ってないな」
悠喜「俺も」
恭平「ほとんど連絡取ってない」
雅也「俺は、去年の夏に五十川君たちと集ま
ったよ」
悠喜「ああ、美彩と春奈のグループ？」
雅也「そうそう」
賢哉「五十川、あいつ今、大阪だっけ？」

雅也「うん。去年の夏に、こっちに帰ってきてたから、その時に集まってご飯食べた。でも、それぐらいかな、俺は。専門学校のほうで、いろいろバタバタし始めた時期だったから」

賢哉「他の奴ら、今頃どうしてるんだろうな」

壮吾「安代ちゃんも元気にしてるかな？」

賢哉「あいつまだ残ってるのか」

雅也「言い方な。安代先生も西澤先生も、まだ残ってるみたいだよ。佐藤先生は、俺たちの卒業と同時に定年迎えたけど、再任用でそのまま残ってるんだって。あの英語の小テストも健在みたいだよ」

悠喜「懐かしいな、篤の小テスト」

雅也「よく廊下に並んで、追試受けたよね」

恭平「あの頃に、戻りたい？」

雅也「たまに、そう思う時がある」

恭平「俺も」

悠喜「俺も、たまに」

壮吾「大変だったけど、いろいろ楽しかった

もんな」
賢哉「俺はもうこりごりだ」
雅也「いろいろあったもんね、あの三年間。特にかどけんは、ある意味では一番騒がせた人だったもんね」
賢哉「俺、そんなに騒がせたか？」
雅也「自覚ないんだ」
賢哉「ちょっとは、ある」
雅也「ちょっと？」
賢哉「（苦笑して）分かってる。迷惑かけたけど、支えてもらって感謝してるよ。今日だって、こんな席設けてくれて、みんながこうして集まったんだから」
悠喜「三年間大変だったけど、今思えば、俺たちって何かと支え合ってあのクラスで過ごしてきたんだよな」
恭平「うん」
壮吾「どこの世界でも、支えてくれる人がいるって、有難いことなんだよね」
雅也「何年かに一度でも良い。こうやって、

俺たちには支えてくれる人がお互いにいるんだってこと、再確認できると良いよね」

それぞれに大きく頷く一同。

3

木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで原稿を書いている――険しい顔をしながら、何度も打ち直しており、溜息をつく。

背中を伸ばしてあくびをすると、雅也のスマホに通知が来る――画面を開くと、武からのＬＩＮＥが来ている。

雅也「松井……？」

と、ＬＩＮＥの文面を読む。

武の声「久しぶり。ゴールデンウイークに、愛知帰るんだけど、一緒に高校遊びに行かない？」

と、返信をする雅也。

雅也の声「久しぶり。俺も行きたい」

と、武から返信が来る。

武の声「ありがとう。学校には、俺から連絡

しとく」

と、返信をする雅也。

雅也の声「よろしくです」

と、武からスタンプで『ＯＫ』の返信が来る。

雅也「（呟くように）松井も海上自衛隊で頑張ってるんだ。俺ももう少し頑張ろ」

と、再びパソコンで原稿を書き始める。

4

中央高校・進路指導室（数日後）

雅也と武が来ており、安代がお茶を出す。

安代「今日はありがとう。わざわざ来てくれて」

雅也「ご無沙汰ばかりで。松井がちょうどこっちに帰ってくるから、一緒に学校に遊びに行こうって誘ってくれたんです」

武「一人で行くのもつまらないと思って。それで、高校時代、散々お世話になった木内に声をかけたんです」

安代「お世話になったって？」
雅也「（苦笑して）今だから言えることなんですけど、松井、毎日俺に時間割を聞いてきたり、いろんな授業ノートを貸したりしてたんです」
安代「そうだったの」
武「俺が高校を卒業できたのは、木内のおかげなんです」
雅也「まあ、自分で言うのも何ですが、二組の大半は僕のノートがあったから、卒業できたと言っても過言ではないかもしれません」
武「それは言えてるな。多分、木内の授業用ノートを指紋鑑定したら、クラスの大半の奴の指紋が出てくるかも」
雅也「間違いない。当時ね、テスト勉強しようと思って鞄の中を見たら、ノートがないんだよ。で、誰に貸したかなと思って思い出そうとしたんだけどいろんな子にいろんなノート貸しちゃったせいで、誰に何のノ

ートを貸したの把握してなかったせいで困ったことだってあったんだから」

安代「そんなにみんな、木内君のノートを当てにしてたんだ」

雅也「卒業式の時、みんなで色紙に寄せ書き書いたじゃありませんか。あれだって、『ノートありがとう』って多くの子が書いてたんですよ。僕との思い出はノートしかないのかよって思いましたけど」

武「それぐらい、木内のノートは重要だったってことだよ」

雅也「英語の予習ノートなんて、松井に毎回一番に貸してたじゃん。しかも、借りる前から、自分に最初に貸してほしいって予約なんてしちゃって。でも、松井にはそれで感謝してることがあるの」

武「何？」

安代「……？」

雅也「ノートができたら最初に見せてくれって言ったでしょ。だから、待ってる人がい

る以上はこっちも早くやらなきゃなと思ったの。どうしたって面倒なことって後回しにしちゃうじゃん。だから、まるで〆切に追われれるような気分で早く進めることができたの。それに、自分一人ならちょっと字が汚かったり適当にやっても良いかなと思ったんだけど、やっぱり誰かが見るってこと考えると、綺麗とまではいかないけど、最低限読める字で書こうと思うし、ちゃんとやらなきゃなって思ったの」

安代「（苦笑して）それじゃあ何のために、予習したのか分かんないわね」

雅也「本当そうなんですよ。予習は授業のためだと思ってやってるはずが、いつの間にか目的が変わっちゃって、何のためにノートに予習してくるのか分からなくなるんですよ」

安代「でも木内君は、それを三年間ずっとやってたんだ」

雅也「よくやったなと自分でも思います」

武「木内がいなかったら、あのクラスは成立してなかったレベルですよ」

雅也「そんなことないわ。（と安代に）逆に、安代先生にはいろいろご迷惑をおかけしたと思いますし、今思えばあんなクラスの担任をされて、随分ご苦労だったんじゃないかって」

安代「ああいうクラスの担任は初めてだったから、正直大変なことだってあった。でも、木内君たちと一緒で、今となってはその大変だった出来事も良い思い出になってるの。後に先にも、あんな個性あふれるクラスの担任を二回もやらせてもらったことは、教員生活の中で忘れられない経験になると思う。素敵な思い出をありがとう」

雅也と武、お互いの顔を見て微笑み合う。

5　同・廊下～3年2組教室

雅也と武が歩いている。

雅也「今日は、ありがとう」
武「こちらこそ」
雅也「安代先生、今は進路指導主任らしいから、また別の意味で忙しくされてるんだろうね」
武「木内は、専門学校行っても、相変わらず脚本書いてるんだろ？」」
雅也「まあね。今度、自主ドラマを作ろうってことになって、友達とその準備の真っ最中」
武「すげえな」
雅也「松井、大分痩せたよね。やっぱ、海上自衛隊で鍛えられた？」
武「そうかもな。あの頃から、二十キロは落ちたから」
雅也「二十キロ……？　そりゃ、大分絞ったね」
武「今は神奈川だけど、来月からは京都に異動になるんだ」
雅也「いろいろ大変だね」

と、３年２組の教室にやってくる――
綺麗に机が並べられている。雅也と武、
教室を眺めると、
雅也「もう、あの頃には戻れないんだよね」
武「戻れないのが人生ってやつだからな。これから俺たちは、前に向かって進んでいくんだよ」
雅也「……」
武「良い原稿書けよ、木内先生」
雅也「うん、ありがとう」

6　名古屋芸術専門学校・４階・４０１教室（数日後）
雅也と正樹が、原稿を見ながら相談をしている。
正樹「ここのシーン、もう少し短くできないかな」
雅也「セリフカットしたほうが良い？」
正樹「だな。無理に全部説明セリフにする必要はないよ。映像として見せるシーンにす

れば良いだけの話なんだから」
雅也「撮影の負担になるんじゃないかと思ってさ」
正樹「ラジオドラマじゃないから、ダラダラと長ゼリフにしなくても良いんだよ。画で見せるものは、画で見せないと」
と、瑞枝が入ってくると、
瑞枝「ただいま」
雅也「あれ、どこ行ってたの？」
瑞枝「キャリアセンターに、インターンの手続きしてきたの」
雅也「インターン？」
瑞枝「私と加藤、来月の学園祭が終わったら、インターンで東京に行くの」
雅也「どれぐらいの期間なの？」
瑞枝「三ヶ月」
雅也「そんなに映像専攻から二人も抜けちゃうと、ここも大変じゃない」
正樹「まあな。でも、進路のためだからさ」
と、篤志が入ってくると、

篤志「うっちー、ここにいたんだ。探したよ」
雅也「あつぽん、どうしたの？」
篤志「お化け屋敷の準備」
雅也「あれ、もうそんな時間？　ごめん、うっかりしてた」

7　同・8階・801教室

裕司、和也、拓海、後輩たちが、それぞれに準備をしている――雅也と篤志が入ってくる。

篤志「うっちー見つけたよ」
雅也「ごめん、うっかりしてた」
裕太「よし、これで揃ったな」
拓海「まだまだ準備かかりそうだな」
和也「うっちー、こっち手伝って」
雅也「あいよッ」

と、裕司たちに合流し、準備を進めていく。

つづく